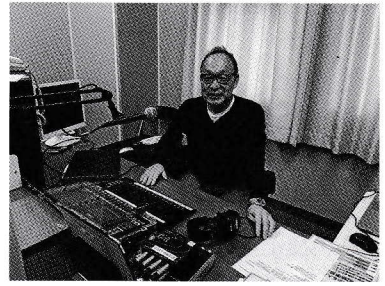


医師協だより誌上 DJ!

— 今回のテーマは、昭和歌謡 (上) —

三原市城町／内科 小園 亮次



FMみはらのミキサー席にて

なんか最近、昭和歌謡についてとり沙汰される事が多くなっている気がしませんか？

筒美京平が亡くなったことが一つのきっかけだったかもしれません（令和2年の10月なのでもう1年以上前でした）。流行がひと時代回って昭和のサイクルに入っているのかもしれませんが、一方、世界の中で日本の凋落が語られることが増えてきた昨今、実はパワーとアイデアに満ちてあふれていた昭和の高度成長期を再発見する空気も生まれているとも思えます。

三原にFMみはらというコミュニティー局があります。そこではリスナーが自分の趣味で選曲した10曲ほどを1時間ほど、丸ごと本人の解説付きで放送してくれるという、太っ腹な番組があり（「ベストヒットリクエスト」といいます）、私はその番組の常連として2か月に1回ほど公共の電波を使ってわが趣味を拡散しております。毎回テーマを「ファンキー」とか「ラテン」とか「夏」とか絞っていくのですが、この度「昭和」というテーマに取り組んだところ、その面白さに改めて魅

了されました。本稿ではそんな昭和歌謡の魅力、そして皆様に聞いていただきたい名曲の数々につきご紹介したいと思います。

昭和と言っても懐メロだけではなくいろんな切り口で語ることができます。今回は次の3つのカテゴリーに分けてご紹介します。それは①懐メロによる「昭和再発見」、②昭和曲のカバー、③主に昭和を知らない若い人による「昭和ネタ」です。

最近の音楽配信サービス（Apple MusicやSpotify）の充実には目を見張るものがあり、どんなマイナーな曲でも手に入りますし、それ以前に曲名をググればすぐに映像付きの楽曲が聞けます。本稿もぜひスマホかパソコンを片手に読んでいただければ幸いです。

ちなみに私、昭和のリアルタイム（昭和40年台ころ、小学生）では「歌謡曲」というものがキライでした。今にして思うと「日本語」というだけでおしゃれじゃなく思えたのでしょう。アメリカやイギリスの「洋楽」と



FMみはらスタジオにて、パーソナリティの原田真弓さん（手前）と、番組スタッフのくまちゃん

比べて日本語は曲にのらないし、日本人の演奏もなんかリズム感がわるくて、特にドラムがダサいと感じられました。さらにその思いは昂じて日本人であることも気恥ずかしく、いっそ「外人」に生まれたらよかったのと思っておりました（当時はフランス人を希望）。肥満児でパツパツの半ズボンを履いて自転車に乗って遊んでいたくせに。それでもっばら「洋楽」派となり、やがてブルース、ソウル、R&B好きとなっていきました。しかしその後はすそ野も広がって立派な大人のリスナーになっております（笑）。それにしても40歳を過ぎたころから新しい音楽にアップデートするのにエネルギーを要するようになってきていますね（昔、親父世代が軍歌や演歌を愛好するのに閉口したもんですが、今われわれが70年代のソウルやクラシックロックを好むのも若いもんからみたら、実は何ら変わらないのだろうなとしみじみ思うところです）。



FM みはら局長の増原 進さん

FM みはら：87.4MHz
ウェブサイトのサイマル放送なら、パソコンやスマートフォンで放送が聞けます。専用アプリは不要です。
<https://www.fm-mihara.jp/>

本題にもどって、ぜひ皆様に聞いていただきたい曲のご紹介に移ります。

カテゴリー（1）懐メロ・昭和再発見

1. 70'sソウル風味付けの楽曲群

昭和もいろいろありますが、私が一番昭和を感じるのは1969年くらいから70年代初頭くらい。昭和歌謡史的には演歌からポップス系歌謡への変わり目くらいの時代です。洋楽に目を向ければ、その頃は私が最も好きな70'sソウル最盛期（Soul Trainの時代）。日本の歌謡曲もその影響を受けてソウル・ポップをネタにしたものが多かったのだと今回、改めて認識しました。「ゴーゴー」なんてものが日本でも流行っていた時代ですからね。今聞いて「オッ」と思う歌謡曲は大概、洋楽ソウルやポップス系風味付けの楽曲群でした。いい曲がたくさんありますが代表的なところ、ややベタですが尾崎紀世彦「また逢う日まで」は大好きです。和田アキ子は今の姿を見ているとなんかイラつきますが、当時は和製ソウルシンガーとして結構いい仕事をしています。「古い日記」「あの鐘を鳴らすのはあなた」などはイイですね。洋楽「黒い炎」の英語カバーもありますが、やはり日本人が英語をちゃんと歌うのは困難だとよくわかります。「また逢う日まで」の洋楽っぽさは、当時の「マンダム」CMの歌（チャールズ・ブロンソンが出るやつ、ジェリー・ウオレス 男の世界）とあわせて聞けばよくわかります（そっくり）（注）。

そのほか味わい深いのは有名な歌ですが平山三紀の「真夏の出来事」。これはモータウンソウルが下敷きになっているようです。平山三紀の声がいいですねえ。カルトなファン

（注）その後調べたらこの曲なんとマンダムのCMだけのために作られたもので、日本のみの発売でした。

がたくさんいると思われま。タモリ倶楽部の廃盤アワーで絶大な人気だったのを覚えています。「彼と車にのって♪」行く「海」は油壺とのこと。平山三紀ってちょっとワルそうだけど実像はすごいマジメだそうです(1)。

「また逢う日まで」と「真夏の出来事」はともに作曲が筒美京平。この人は常に洋楽からネタ探しをしていたとのことですが、決して洋楽好きではなかったとのこと。つまり時代にあわせて曲が書ける職業作曲家ということ(1)。今では信じられないことですが、この筒美京平、米国ソウルの大スター、Three degrees (スリーディグリーズ) に曲を提供しています(「にがい涙」)。といっても日本限定発売で歌詞も日本語(安井かずみ)。CBSソニー、1974年の企画でした。さらに珍品はセクシー・バス・ストップというソウルトレインのテーマによく似たインストの曲ですが、これはJack Diamondという変

名を使って書いた筒美京平の作品です。

珍品といえば、ちょっと笑えるのはマギーミネンコ「燃えるブンブン」。これは「ブギウギ」と思われますがミネンコ、歌い方は完全に演歌です。ちなみに医者になってから病院に「リネン庫」というのがあるのを知って笑いました。

2. 昭和セクシー歌謡の系譜

この時期の歌謡曲の流れで見逃せないのが「セクシー歌謡」路線です(2)。「エロ」の需要はいつの時代にも旺盛なのですが、当時は今ほど「エロ」がどこに行っても手に入るような時代じゃなかったので、青少年は思わせぶりな歌に想像を膨らませていたわけ(2)。 「セクシー歌謡」はそういった「エロ」需要を狙い撃ちするため意図的にプロデュースされた作品群と言えます。奥村チヨ、辺見マリ、ちょっと下って山本リンダ、夏木マリが4大セクシー歌手で

曲リスト

歌手名	曲名	作詞	作曲	発表年
尾崎紀世彦	また逢う日まで	阿久 悠	筒美 京平	1971
和田アキ子	古い日記	安井かずみ	馬飼野康二	1974
和田アキ子	あの鐘を鳴らすのはあなた	阿久 悠	森田 幸一	1972
和田アキ子	黒い炎	B. Chase & T. Richards		1971
ジェリー・ウォレス (Jerry Wallace)	男の世界 (LOVERS OF THE WORLD)	Jerry Wallace		1970
平山三紀	真夏の出来事	橋本 淳	筒美 京平	1971
スリーディグリーズ	にがい涙	安井かずみ	筒美 京平	1974
DR.DRAGON & THE ORIENTAL EXPRESS	セクシー・バス・ストップ	(インストロメンタル)	Jack Diamond (筒美京平)	1976
マギー・ミネンコ	燃えるブンブン	橋本 淳	鈴木 邦彦	1974
奥村チヨ	恋の奴隷	なかにし礼	鈴木 邦彦	1969
奥村チヨ	恋泥棒	なかにし礼	鈴木 邦彦	1969
奥村チヨ	恋狂い	なかにし礼	鈴木 邦彦	1970
辺見マリ	経験	安井かずみ	村井 邦彦	1970
ミッシェル・ボルナレフ	シェリーに口づけ	ミッシェル・ボルナレフ		1969
ミッシェル・ボルナレフ	Holiday (愛の休日)	ミッシェル・ボルナレフ		1972
セルジュ・ゲーンズブルと ジェーン・バーキン	ジュテーム・モア・ モン・ノン・ブリュ	セルジュ・ゲーンズブル		1969
辺見マリ	ダニエル・モナムール	安井かずみ	村井 邦彦	1969

す⁽²⁾。いずれもさわどい歌詞とセクシーな歌唱法、強烈な振りを使って「殿方」だけでなく子供たちにも大ブームを巻き起こしました。まあ、今聞くと、こんな刺激的な大人の歌を小学生たちが意味もわからず大声で歌っていたものだと思います。エロエロもみんなでやれば怖くない（5-7-5で）。

昭和セクシー歌謡でお勧めしたいのは奥村チヨと辺見マリです。

まず奥村チヨ。69年に「恋の奴隷」が大ヒットして「恋泥棒」「恋狂い」と「恋三部作」が次々発表されるのですが、まあ一度聞いてみてください。のけぞるほどの「お色気」です。彼女はじつは小さいころからちゃんと声楽を習っていたらしくて本格的な歌唱力に裏うちされた高度な芸術にも思えます。エロの大家、みうらじゅん氏も奥村チヨの大ファンで「コケティッシュ ボム」という、彼女の曲だけを集めたコンピレーションアルバムを発表しているほどです。ただ奥村チヨ本人は当時20歳そこそこで、そのようなさわどい歌を歌わされるのにかなり抵抗があったそうです。昭和の偉い作曲家の「先生」にセクハラ、パワハラを受けながら仕込まれている姿が目には浮かびます。恋三部作の中では一番有名なのは「恋の奴隷」ですが、私としては「恋泥棒」がおすすめです。クセになる良さです。

続いて辺見マリ。「やめてエー 愛してないなら」と歌う「経験」は当時生きていた方ならば耳に残っているはず。辺見マリは奥村チヨと同じセクシー歌謡ながら少し路線をかえてプロデュースされています。狙いはヨーロッパ風。辺見マリ自身もスペイン系のハーフです。当時はニッポンのカルチャーのなかで「フランス」が今よりずっとメジャーな感じでした。アランドロンの映画なども人気

あったし、今は懐かし「ミッシェル・ボルナレフ」なども日本のヒットチャートをにぎわしていました。「シェリーに口づけ」などは今でもしょっちゅう耳にしますが、「Holiday 愛の休日」などと聞くと「なつかし〜」となる人も多いのでは？ 当時の日本人にとってフランスのイメージはズバリ「エロ」です（もっと「エロ」だったのは「フリーセックス王国」スウェーデンですが）。極めつけは1969年に日本を含む世界でヒットしたセルジュ・ゲーンズブルとジェーン・バーキンによるジュテーム・モア・モン・ノン・プリュでしょう。これも多分みなさん聞き覚えのある曲です。日本のポップカルチャーにおけるこの曲の破壊力は圧倒的だったそうで、カバーやフォロー的な作品がたくさん出ています。ちなみにこの曲、後半はほとんど全部女性の喘ぎ声です。

辺見マリに話をもどすと、今回おすすめしたいのは、大ヒットの「経験」に先立つ彼女のデビュー曲「ダニエル・モナムール」です。ジュテーム……を意識していたと言われるフレンチポップ風楽曲で、奥村チヨと同様、基本のしっかりしたセクシー唱法と間奏に挿入された本人のフランス語セリフが聞きどころ。なんかいやらしそうなこと言ってしまうのでセクシー感満載です。「経験」と比べるとちょっとシルビーバルタンみたいな可愛い感じに作ってあって意外に思う方も多でしょう。彼女はこの曲のあとキャラ替えをしてあの「経験」の挑むようなセクシー路線に舵を切り（レコード会社のプロデュース方針でしょうが）ピクパンを起こしたようです。私は「経験」よりこっちが好きです。

文献

- (1) 近田春夫「筒美京平 大ヒットメーカーの秘密」文春新書 1325
- (2) 馬飼野元宏『にっぽんセクシー歌謡史』（おぞの りょうじ）